絶対的孤独の物語

― 村上春樹「トニー滝谷」「氷男」におけるジェンダー意識 ―

山根　由美恵

はじめに

「トニー滝谷の本当の名前は、本当にトニー滝谷だった」という冒頭に顕著なように、テクスト「トニー滝谷」は奇妙な名前が物語の核であり、村上文学に多く存する関係性（アイタッチメント）の希薄さと喪失が描かれている。[1]それは、奇妙な名前という設定だけが特異で、中身はいわゆる春樹的な喪失物語、という意味ではない。「トニー滝谷」は、大きな枠組みで言えば喪失からくる孤独の物語なのだが、父の存在や語り手に特徴があり、運命の皮肉さと絶対的孤独―誰とも関係を結びえない状況―の描き方に成功している。

しかし、ジェンダーという視点から見たとき、「トニー滝谷」は男性中心の孤独が形成されていることに気づく。テクストはトニーの孤独に焦点化されているため、妻の抱えている孤独を内閉し、彼女の叫びが封じ込められているのである。一方、村上は短編「氷男」において女性の絶対的孤独を描いており、短編集では「トニー滝谷」の直前に配していることから、孤独のジェンダー差を描き分けたことが推測される。本稿は、村上がジェンダーの差異を書き分け、二作には相対化・緊張関係があることを論じるものである。

これまで「トニー滝谷」におけるジェンダーを問題にした研究はないが、『村上春樹作品研究事典（増補版）』（二〇〇七・一〇、鼎書房）の執筆者近藤裕子氏の次の指摘は重要である。

日本人でありながら混血児のような名前を付けられたことが、その後の彼の孤独な人生を形作ったとすれば、そこに名前（表層）が支配する人間性（深層）というモチーフを読み取ることも可能だろう。一方、トニーの妻の過剰な衣装愛は「買い物嗜癖」のフィクショナルな変種だが、その病を引き出したのがトニーの愛情と財力であったとすれば、他者への加害は悪意の中だけ

ではなく、関わることそのもののなかに既に含まれているということになるかも知れない。

事典の記述のため、近藤氏は指摘だけに止まっているが、表層が支配する深層の問題はテクストの核心と言える。また、買い物嗜癖とは「買い物が心理的葛藤の解消手段と化した状態が買い物嗜癖で、その極端な場合には、買い取った商品を使うことさえしない。それどころか、買った物を見るたびにゆううつになったりする」[2]ことであるが、買い物嗜癖の本質に注目すると、封じ込められている彼女の孤独（サバルタンの声）が浮かび上がってくるのである。以下、孤独に関わる表層と深層、買い物嗜癖の問題を取り上げ、孤独のジェンダー差がもたらす緊張関係について述べていくこととする。

一　愛する者を喪うことの苦悩

テクストにおいてトニーの孤独は変容している。少・青年期のトニーは、無自覚の孤独―本気で人と関わること、愛することを知らなかった状態―にあった。しかし彼女と出会うことで初めて孤独を実感し、彼女が死んだ後は絶対的孤独―誰とも関係を結びえない状況―へ陥っていく。これら孤独の内実が変容してゆく過程を追ってみたい。

1　無自覚の孤独から自我の目覚めへ

トニーの孤独な状況は、ハーフでもないのに「トニー」という名前を付けられたことに起因し、表層（名前）と深層（日本人であること）との不一致により疎外が生み出されている。テクスト第一点目の特徴である。「彼が名前を名乗ると相手は妙な顔をするか、あるいはちょっと嫌な顔をした。多くの人はそれを悪い冗談のようなものに取ったし、中には腹を立てる人間さえいた」。この名前と一生付き合わねばならず、名前を名乗ることで相手へ不快感をもたらすことの繰り返しである。彼はコミュニケーションの第一歩でマイナスの立場にいる。

孤独な状況は名前のみならず、身近な環境にもある。母親は死別し、父・省三郎は自分のことのみを考え、息子には構わない。トニーはひとりでいる状況を「人生のある種の前提」と考え、孤独とは感じない。愛情を受けたことがなく、無自覚になっているのである。

孤独を孤独と認識しないまま、トニーは絵を描く青年へと成長する。彼の描く絵は、彼の人間性を表すように無機質なものであり、「まわりの青年たちが悩み、模索し、苦しんでいるあいだ、彼は何も考えることなく黙々と精密でメカニカルな絵を描き続けた」。就職に関しても彼の合理的な才能は役に立ち、売れっ子のイラストレ

ーターになる。彼は自我の苦悩とは無縁の人間であった。

しかし、ある日トニーは恋に落ちる。彼は彼女に会って初めて、自分が孤独であったこと、「孤独とは牢獄のようなもの」であること、「どれほど多くのものを失ってきたか」ということを知る。いわゆる自我の目覚めとその苦悩である。愛することを知り、愛されることを願うことで、これまでの人生が自分自身を損なっていたものであったことを知る。

ここまでは、「トニー」という奇妙な名前を付けられたという点を除けば、愛を知らなかった孤独な男が真の愛に目覚めるという、物語のパターンの一つと言える。

2　買い物嗜癖―朧化された彼女の孤独―

次にテクスト第二点目の特徴、妻が服を買いすぎる設定、買い物嗜癖が現れる。結婚する前の彼女は美人ではないが、服を上手に着こなし、その姿は「まるで遠い世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとても優美に服をまとっていた。服の方も彼女の身にまとわれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた」と描写されていた。服は彼女の魅力を最大限に引き出し、この段階では彼女の深層（人間性）と表層（服）とは良好な関係にあった。

ただ、彼女はトニーに会う以前から、給料の殆どすべてを服代にあてていた。給料の殆どを服代にあてるという行動は、買い物嗜癖に当てはまる。前出の斎藤学氏は、「買い物嗜癖は行為過程についての嗜癖に属するが、他の嗜癖と同様、人間関係の影響を受けている。買い物し過ぎる人たちとは、他人との関係に傷つきながら、怒りや悲しみに直面することを怖れている人々である。人との付き合いに臆病になっていて、そこでは充実感が得られないので、買い物で代理の満足を得ようとしているのである」[3]と述べている。これを当てはめるなら、彼女はトニーに会う前から「他人との関係に傷つきながら、怒りや悲しみに直面することを怖れている」状態、心に何らかの傷を負った人間と推察できる。例えば、次に例を挙げるように、自分に自信がないので、高価な服を着こなすことにより、自分自身を確立しているというものである。

（引用者注　父が妹を偏愛し、家族に無視されてきた）ジェニファーは今、優能な幹部社員なのだが、自信が著しく欠如している。それを補う方法の一つとして、上から下まで申し分のない身なりをし、きれいな洋服を着ている。まるで、完全にコーディネートされた服装で、精神生活の混乱や動揺を隠そうとしているかのように。洋服にかける金で収入の大きな部分がとんでしまうが、ジェニファーにとっては、身なりがきちんとして

いることと、どんな時でも平静を崩さないこととは、金に代えられないほど大切なことなのだ。[4]

ジェニファーと同様に、彼女もブランドの服を給料ぎりぎりの状態で買っており、その高価な服を着ることで彼女は輝いていた。逆に言えば、ブランドの力がなければ彼女は自分自身を確立することができない状態にあったのである。

トニーは彼女を見て「彼の心を激しく打つものがあった」と感じるが、それはトニーが自身と同じもの—表層が深層（人間性）の形成に密接に関わっている人間の匂い—を感じたのではなかろうか。彼女は服のブランドの力を借りて自分自身を確立させている、つまり、彼女は服がなければ自分自身を確立できない空白のある存在である。トニーも奇妙な名前や両親からの愛の欠如によって人間性に空白を生じていた。この共通点はトニーが彼女に烈しく惹かれる必然性となり、奇妙な名前と買い物嗜癖というモチーフが有機的に繋がっていると言える。

元々彼女は自身の空白を買い物で埋めていた。この彼女の空白はトニーと結婚することで広がっていった。経済的な理由として、トニーが裕福であったため、制限なしにブランド服を買える状況になった。更に子どもも生まれず、時間をもてあますようになり、新しい服を買うことが彼女の生きる目的と化したのである。この状態は「何かの中毒みたい」な状況と描写されている。彼女の買い物嗜癖が加速したのは、トニーとの関係が引き起こしたことは疑いない。

トニーは彼女を得ることで自身の孤独は癒された。しかし、彼女の空白はトニーと結婚するということだけでは埋められなかった。彼女は他に好きな人がいた。しかし彼との〈永い春〉に疲れており、自分を大事にしてくれそうな誠実さを持つトニーと結婚する。結局、彼女は自分が求めている人ではない人と結婚したのである。

しかし、彼女に対して愛情を持って接し、自分の欲しい高価な服を際限なく買ってくれるトニーは、文句の付けようのない夫であった。だからこそ、彼女は自身の空白を埋めるための買い物で自責の念にかられるのである。買い物嗜癖の悲劇性は、買えば買うほど空虚感や罪悪感が増してしまうことである。ロザリンド・H・ウィリアムズは「かつてない品物と時間の拡張によって、私たちは明らかな恩恵を受けている一方で、『もの』をもちすぎているにもかかわらずもっと欲しいと思うことで、自責の念と罪悪感、欲望と羨望、不安と何よりも良心の呵責を抱くようになった。[5]」と述べている。

このような状態の彼女に対し、トニーは「こんなに沢山の高価な服が必要なんだろうか」と話す。彼の言葉は正論であったが、彼女の精神状態を理解せず、心の空白を埋めるための代替手段を講じなかったため、彼女は更に追い詰められる。トニーの言葉を守った彼女は、新しい服を買えない日々を「自分が空っぽになってしまった

ような気がした」と感じ、アイデンティティー・クライシス目前の状態となった。結果、彼女は服の呪縛から逃れることができず、服のことを考えながら事故死する。

このように、買い物嗜癖に注目すると彼女の孤独が漠然と浮かんでくる。また、買い物嗜癖に陥った彼女の様子は、テクストの中で唯一彼女の心情が描かれている場面である。しかし、テクストは彼女の孤独を死によって封じ込め、彼女を失ったトニーの孤独へ焦点化していく展開となってゆく。

更に、トニーや父・省三郎には固有名があるのに対し、彼女に名前が付けられていないことからも、「トニー滝谷」というテクストの焦点が彼女になく、トニーや父に重心があることがわかる。彼女の存在は、死によって封じ込められた上に、名前がないということで更に薄められているのである。

3　絶対的孤独へ

トニーに孤独の意味と幸せを教えてくれた妻が死に、彼は妻の突然死を認識することができない状態にある。ここでテクストの第三点目の特徴、妻の服を他人に着てもらう試みが現れる。この行為は、奇妙な名前によって無自覚の孤独に陥っていたトニーと買い物嗜癖に陥った妻の死を結びつけ、彼の絶対的孤独を際立たせる。

葬儀の十日後に、トニーは妻と同じサイズのアシスタントの女性を募集する。前出のソ氏は「無限の『とりかえ』の可能性」と述べているが、この行動はむしろ、妻の独自性を感じたかった行為ではないか。つまり、服を着こなしていた妻が死んだ。同じ服を他人が着ると、妻のように着こなすことはできない。いわば死んだ服になる。そういう姿を見ることで、妻の死を徐々に受け入れる、という計画なのである。

女がこの条件を受け、サイズを確認したいと言ったので、トニーは衣装部屋へ女を連れて行く。しかし、妻の命を失わせた服は、何も知らない女を泣かせてしまうぐらいの力を持っていた。それは沢山の高価な美しい服が「まるで彼女のために作られたみたいにぴったり」であり、「これといって特徴のない顔をした二十代半ばの女」である女の、特権的な居場所のように感じられたからであろう。

かつては妻の分身のように輝いていた服であったが、「その服は彼には妻が残していった影のように見えた」。しかし、「影」でしかないはずの服が、一回見るだけで何も知らない女を泣かせてしまう。妻はそれに取り憑かれて死んでしまった。いわば、表層（服）が深層（人間）を支配している。彼自身、奇妙な名前という表層によって孤独な状況に追いこまれ、無自覚の孤独な状態の少・青年期を送り、人生を損なってきたと感じていた。彼は、自身の名前と同じように、服という「影」、人間を支配する表層を、「憎んでいるこ

とにふと気づいた」。そして、死んでしまった以上、もう何も元に戻らないことを理解する。「孤独が生暖かい闇の汁のようにふたたび彼を浸した」が、この孤独は前以上にトニーを絶望に追いこむ。

彼は服を売る。年月が経つにつれ「そこにあったものを思い出すことができなくな」り、鮮やかな感情が薄れ、あれだけ愛していたはずの妻の顔さえ忘れていく。もはや彼の心は欠落感しか存在しない。妻の死んだ二年後に父も死ぬ。父の形見のレコードも存在が自身を息苦しくさせるので売り払った。「レコードの山がすっかり消えてしまうと、トニー滝谷は今度こそ本当にひとりぼっちになった」。何かを感じ取る能力が希薄化していくトニーは、この後他の誰かと新しく関係性を結ぶ未来が全く予想できない結末となっている。ここには、この後何も変わらない絶対的孤独のみが残される。

二　父子関係・語り手にみる絶対的孤独

二では父（省三郎）と語り手という観点から、トニーが陥る絶対的孤独の様相を捉えたい。父の存在は、トニーの人物像以上にこの物語で悲劇をもたらす要因となっている。それは単に奇妙な名前を付けたというだけではなく、トニーと対照的に語られることによって、運命の皮肉さを感じさせる存在として描かれている。

1　魔都上海　―享楽の日々から刑務所へ―

省三郎の性格づけは「当時の上海という街が提供する技巧的あでやかさの方が彼の性格にはよくあっていたようだった」とあるように、上海との共通性がある。元々漁村であった上海は、アヘン戦争を終結させた一八四二年の南京条約により条約港として開港する。その後、一八四八年以降にイギリス・フランス等の租界が形成され、列強支配が目に見える形で進んでいた「中国半植民地化の象徴」[6]でもあった。そして、一九二〇年代から三〇年代にかけて極東最大の都市として発展した。省三郎が訪れた上海（太平洋戦争が始まる四年前＝一九三七年）は、新興の国際都市であり、かつ「魔都上海」と呼ばれた独特の雰囲気を持っていた。上海という場は、省三郎の享楽の様を描く格好の舞台設定と言えよう。

しかし、歴史的事実を鑑みると、一九三七年は盧溝橋事件が起きた日中戦争勃発の年である。上海においても抗日運動（第二次上海事変）が起き、在留日本人の大多数は日本に引き揚げた。当時の上海は眼前に凄惨な殺戮がおこなわれていたのである。[7]

「風の歌を聴け」をはじめとし、中国人や中国は村上テクストに多く登場する。近年村上が中国に対し拘りを持っていることが指摘されており、[8]そこには戦争の影響が垣間見える。

テクストにおける戦争の影響とは、戦争状況にありながらそのこ

とに無関心な人間という形で現れている。省三郎は「日中戦争から真珠湾攻撃、そして原爆投下へと到る戦乱激動の時代を、彼は上海のナイトクラブで気楽にトロンボーンを吹いて過ごした」、「要するに、滝谷省三郎は歴史に対する意志とか省察とかいったようなものをまったくといっていいほど持ち合わせない人間だったのだ」と描かれる。省三郎は戦争の当事者意識が希薄である人間として強力に性格づけられている。

また、省三郎の特徴として類い希な好色性が挙げられる。執着のない性格は似ているトニーであるが、この点は全く受け継がれなかった。好色で生の享楽を尽くす省三郎と機械的な冷静さを持つトニーという対照を、ここで挙げておきたい。

享楽の日々を送っていた省三郎であるが、敗戦により刑務所に入るという危機が訪れる。ここで改稿に目を向ける。「トニー滝谷」には三つのヴァージョンがあり、『レキシントンの幽霊』版は最終形となっている。[9]（初出『文藝春秋』版　一九九〇・六→『村上春樹全作品⑧』版　一九九一・七→『レキシントンの幽霊』版　一九九六・一一）。

次の場面は省三郎が刑務所に入れられた場面である。

滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死とのあいだには、文字どおり髪の毛一本くらいのすきましかなかった。しかし彼は策を尽くして（それがどんな策だったか、滝谷省三郎は誰にも語ろうとはしなかった）なんとかその苦境を脱し、命からがら日本に引き揚げてきた。たとえそれが人前で口にすることが憚られるような種類の策であったにせよ、そのような父親の現実的な抜け目なさによって、トニー滝谷の存在もまた可能ならしめられたわけである。（初出）

←

滝谷省三郎にとって人生最大の危機だった。そこでは生と死とのあいだには、文字どおり髪の毛一本くらいの隙間しかなかった。死ぬこと自体はそれほど恐ろしくはなかった。頭を撃ち抜かれて、それでおしまいなのだ。苦痛はほんの一瞬で終わってしまう。これまで俺はやりたいように生きてきたし、ずいぶんな数の女とも寝た。美味いものも食ったし、いろんないい目にもあった。とくに人生に対して心残りもない。ここであっさりと殺されたとしても文句の言えるような義理はなかった。この戦争では何百万という数の日本人が死んだんだ。もっとひどい死に方をした人間だっていっぱいいるんだ。彼はそう覚悟をきめて、独房の中でのんびりと口笛を吹きながら時を過ごした。来る日も来る日も、鉄格子のついた小さな窓の外を流れる雲の姿を眺め、しみだらけの壁の上にこれまでに寝た女の顔や体をひとつひとつ思い浮かべていった。しかし結局のところ、滝谷省三郎はその刑務所から生きて日本に帰国することのできたた

だ二人の日本人のうちの一人だった。

（『レキシントンの幽霊』版）

改稿によって、省三郎の生に対する執着のなさが顕著になっている。初出では、「現実的な抜け目なさ」の「策を尽くして」「命からがら」日本に帰る工作をするという生への執着が見られた。しかし、『レキシントン』版では「死ぬこと自体はそれほど恐ろしくはなかった」、「とくに人生に対して心残りもない」とある種の諦観・悟りのようなものを感じ、「独房の中でのんびりと口笛を吹きながら時を過ご」す人物へと書き換えられている。改稿により、死を覚悟していたにもかかわらず、生きて日本に帰った二人の日本人のうちの一人とされ、強運の持ち主であることが強調されている。日中戦争中でも気楽にトロンボーンをひいていた性格は、極限状態でも生に執着しない人間として、より強力に性格づけられている。

ここで看過できないのは、省三郎の内省「この戦争では何百万という数の日本人が死んだんだ。もっとひどい死に方をした人間だっていっぱいいるんだ」である。戦争の当事者意識が希薄だった省三郎だが、刑務所に入ることで初めて生命の危機的状況に追い込まれ、「この戦争では何百万という数の日本人が死んだ」といった戦争への述懐が語られる。しかし、あくまで「日本人の死」に関して語られているだけで、中国人のことについては触れられていない。つまり、自分たちが侵略戦争をしたという加害性を認識していない。植民地主義（コロニアリズム）の問題として考えるならば、個人としての性質よりも、これまで多く指摘されてきた加害者意識が希薄な日本人像と呼応している。[10]「ねじまき鳥クロニクル」（一九九四～九五）では日本人の罪に深くコミットした村上であるが、「トニー滝谷」の省三郎は罪意識に欠け、植民地主義（コロニアリズム）のままであることは否めない。

これは省三郎のみの問題ではない。省三郎の加害者意識の欠如は、そのまま妻に対するトニーの加害者意識の欠如とリンクする。トニーは妻を愛していた。しかし、そのトニーとの結婚生活が彼女の空白を広げ、アイデンティティー・クライシス目前の状況に追い込んだことは間違いがない。しかし、トニーは自分自身が彼女を追い込んだことに最後まで気づかなかった。トニーには加害者意識が生まれなかったし、むしろ被害者としてテクストに描かれている。

2　日本に帰国・妻の死―対照的に語られる結婚生活―

省三郎は一九四六年の春に日本に帰る。東京大空襲で両親は亡くなり、兄はビルマで行方不明になり、天涯孤独の身となる。省三郎は生き続けるという本能に従い、小さなジャズ・バンドを結成し、米軍基地めぐりをして生計を立てる。

トニーと省三郎の運命を分けたものには、自我の目覚めの有無に加えて生の本能に従うかどうかという点があると言える。つまり、

省三郎はそれほど生への執着はないのだが、特徴として挙げられる好色性（本能）が、知らず知らずのうちに生へ結びつくのである。

省三郎とトニーは結婚してすぐに妻を亡くすという似た境遇にあるが、二人のその後の人生は対照的である。省三郎は仕事に関しても、家族に関しても、天涯孤独の身を諦念で捉え、そこから生き続けるという本能に従い、その後の生活を成立させている。妻の死に関しても、悲しむという「感情に対して不案内」で、「何か平板な、円盤のようなものがすっぽりと胸の中に入っているような気がした。しかしそれがどういう種類の物体で、どうしてそこにあるのか、彼にはさっぱり理解できなかった」。彼は悲しみのようなものを抱え込むが、それをリアルな感情として感じられない。更に「その物体はずっとそこにあって、彼がそれ以上何かを深く考えることを阻止していた」とあるように、感情の内実を考えることもできない。

一方、トニーは妻を亡くし、父を亡くし、絶対的孤独に陥り、その後の生活において誰かと新しい関係性を結ぶことが全く予想できない。ここに、自我の目覚めの有無だけではなく、生の本能に従う省三郎と冷静なトニーの性格の差により、二人の運命が異なってくる対照構造が見える。

この二人のズレは、トニーが妻を連れて父の演奏を聴きに行く場面に端的に現れている。この場面は初出にはなく、新たに書き加えられたものである。トニーの耳には「かつての父親の音楽とは少し違っているように感じられた」とあるが、父親の音楽は、昔も今も変わらない。変わったのはトニーの方である。人を愛することを知った彼は、人間性が感じられないものは受け入れられなくなった。

省三郎の人物像を整理すると二点特徴がある。第一に、自我の目覚めの欠如である。そのことは感情をリアルに感じることのできない人間とも言い換えられる。元々生への執着が薄かったことに加えて、感情をリアルに感じられず、それを深く考えることもできない。妻を喪った時、悲しみのようなものを感じたものの、希薄な関係を続ける一生を送っていた。それは息子に対しても同様で、愛情を与える環境を整えず、それがトニーを無自覚の孤独の状態に置く。第二は好色性である。これがトニーとの顕著な差異であり、自我の目覚めの有無とともに、二人の運命を変える点である。

対して、トニーは愛する人を見つけ、自我の目覚めとその苦悩を知る。そのことによって、共通点が多かった二人の運命が変化し、相違点の方に重心が置かれ、真逆の運命を辿ることになる。父と息子は、享楽の日々を全うした人生と幸せの意味を知った後に訪れる絶対的孤独の人生という対照的なものとなっている。父が享楽の人生であればあるほど、息子の悲劇が際立つ。

＊

最後に「トニー滝谷」の語り手について触れたい。村上テクストにおいて、初期から中期まで、「僕」という一人称の語りが多かっ

た。三人称主人公は、『レキシントンの幽霊』では「トニー滝谷」のみである。つまり、三人称主人公の語りは殆どない。

テクストの基本構図は、視点人物の内面を語る、というものである。しかし、視点人物が省三郎の場合、その内面は語られない、もしくは改稿によって削られたものが多い。妻を喪ったときの喪失感をリアルな感情に変えられなかった省三郎も孤独な人間であった。しかし、省三郎の暗い内面を敢えて語らないことで、トニーの悲劇（絶対的孤独）が際立つのである。換言すれば、省三郎の強運と享楽性を強調するのは語り手である。つまり、物語の中心はトニーの悲劇（絶対的孤独）なのであり、その悲劇を成立させるように省三郎は性格づけられ、トニーと対照の存在として描かれている。

しかし、トニーに一番寄りそっているとは言え、語り手の淡々とした語り口は全てを無化させる印象を持たせる。つまり、内面描写はトニーに絞られてはいるのだが、そうやって陥ったトニーの孤独な状態を突き放し、運命の皮肉さ、絶対的孤独を決定づけてもいる。

三　サバルタンの声を求めて
―彼女の孤独を顕在化させる試み：「氷男」―

買い物嗜癖に注目することで、封じ込められた彼女の孤独（サバルタンの声）が見えてきた。元々彼女には存在の空白があり、トニーとの関係がその空白を広げていったことが読み取れる。しかし、彼女の孤独は彼女自身の自責の念と死によって封じ込められている。トニーの悲劇が中心のテクストでは彼女の声は消え、彼女の孤独は見出しにくい構造にされている。更に、トニーを孤独の状態に陥らせた父の加害性が焦点化されることで、トニーの加害性は二重に薄められるのである。

ここで視点を変え「氷男」との比較を行う。「氷男」は「トニー滝谷」で封じ込められていた妻側の視点の語りであり、妻の絶対的孤独の物語が描かれているからである。

＊

テクストの中心人物〈氷男〉とは、「氷みたいに冷た」く、過去性が特徴とされている（「私は過去というものを持たないんだ。私はあらゆる過去を知っている。あらゆる過去を保っている。でも私自身には過去というものがない」傍点原文にあり、以下同様）。氷男は自身の記憶を持たず、「氷男は暗闇の中の氷山のように孤独だった」と設定されている。テクストは氷男を愛した「私」の物語であり、「私」の心情が描かれている。

主人公「私」は孤独な氷男を真剣に愛し、誰にも祝福されないまま結婚をした。結婚生活には問題はなかったが、両親・友人など絶交状態だったので誰とも交流できず、また氷男との間にはなかなか子供ができなかったため、時間を持てあますようになった。

「トニー滝谷」の結婚生活も順調であることが強調されており、「氷男」も二人の関係は順調である。しかし、時間を持てあます「私」は生活の反復によって、自らを「影」のように感じてしまう。これをトニーの妻に当てはめることは可能であろう。トニーの妻も子供を持たず、自ら働くこともなく、自分自身の空白が大きくなっていくことに気づいていたと考えられる。彼女はトニーでは満たされない自身の空しさから逃れるため、買い物嗜癖が加速していった。そして彼女は死に、彼女の孤独は封じ込められる。

「氷男」の「私」は氷男を南極旅行に誘うという行動を起こす。しかし、この「私」の行動は選択ミスであった。「私が『南極』ということばを口にして以来、夫の中で何かが変わってしまったような気がするのだ」。「私」は夫と距離が離れていくことをひしひしと感じ、夢を見る。「私は氷の中に閉じ込められたまま、じっと空を見ている。私には意識がある。でも指一本動かすことができない。（中略）自分が一刻一刻過去と化していくのがわかる。私には未来というものがない。ただ過去を重ねていくだけなのだ」。

南極は予想を越えて寂しい土地で、「私は孤独だった。町を一歩外に出ると、そこにはもう氷しかなかった」。しかし、氷男は自らの存在を受け入れてくれる土地を見出した。そこではもう「私」は必要なかった（「南極にいるこの私の夫はかつての私の夫ではないのだ」）。三ヶ月後、妊娠に気づいた「私」は子供が小さな氷男であること、私たちが南極の外に出ることは二度とないことを知る。

今の私にはほとんど心というものが残されていない。私の温もりはずっと遠くの方に離れていってしまった。ときどき私はその温もりのことさえ忘れてしまう。でもまだなんとか泣くことができる。私はほんとうにひとりぼっちなのだ。世界中の誰よりも孤独な冷たい場所にいるのだ。（中略）ねえ君のことを愛しているよと彼は言う。それは嘘じゃない。それはちゃんとわかる。氷男は私のことを愛しているのだ。でもどこかから吹きこんできた風が、彼の白く凍った言葉を過去へ過去へと吹き飛ばしていく。私は泣く。氷の涙をぽろぽろと流し続ける。遠く凍えた南極の氷の家の中で。

「私」は心の交流が持てない夫（氷男）と、心の通わない息子（小さな氷男）と永遠に南極で暮らさなければならない。「私」は南極語を理解することができないので、夫以外の他者と交流することもできない。そして、心が失われ、最後に残された悲しむという感情さえも次第に薄れていくことを自覚している。最も繋がりを求めている相手とのコミュニケーションがとれない人間の絶望感が表れている物語である。

「氷男」結末部に「私はほんとうにひとりぼっちなのだ」とあるが、「トニー滝谷」の末文も「トニー滝谷は今度こそ本当にひとりぼっちになった」と同様の表現である。ここに絶対的孤独という共

通のテーマが見える。ここで差異を考えると、トニーの孤独は、愛する対象が誰一人いなくなったことであり、「氷男」の「私」の孤独は、愛してくれる人（氷男）はいるが、そこには心の交流がないという点が挙げられる。この差異をジェンダーの問題で考える。

村上が描いた男の「絶対的孤独」は〈相手が存在しないこと〉であり、女の側の「絶対的孤独」は相手はいるが、そこには〈コミュニケーションが存在しないこと〉であった。この差異は、心理学の性差の志向性と一致する点がある。[11] ただこれら心理学が導き出した志向性は統計の結果であり、そのことがジェンダー・バイアスとして社会的に機能する現実がある。私は、この結果が孤独に対するジェンダー差を全て説明できると考えてはいない。ここで強調したいのは、「トニー滝谷」と「氷男」における互いのジェンダーが互いを相対化する対のテクストとなっていることである。

「トニー滝谷」は男性側の悲劇の物語として構成されており、語り手がトニーに寄り添ってトニーの悲劇を成立させる語りをしていた。そこでは妻の内面は殆ど語られず、夫の加害性も見えにくい形となっている。その彼女の内面を語ったのが「氷男」と考えるならば、トニーの悲劇を相対化する、強力なアンチテーゼになる。トニーは妻を愛していたが、その愛は彼女とのコミュニケーションを生んでおらず、それが買い物嗜癖へ進ませることになるという、更なる皮肉である。いわば、トニーの加害性を明白にしたテクストと言える。「氷男」が「トニー滝谷」の直前に配されていることを、その効果として考えることは可能だろう。相対化を互いが行うことにより緊張関係が生まれる。これこそが最も注目すべき点なのである。

おわりに―対意識の短編集『レキシントンの幽霊』―

こういった対照意識は、「トニー滝谷」「氷男」だけに留まらない。『レキシントンの幽霊』所収作の構成に目を向けてみると、そこには対意識がみられる。次の表は、テクストの収録順に主要モチーフ・特徴を述べたものである。

1、「レキシントンの幽霊」―幽霊・改稿（初出一九九六・一〇）・病〈救いなし〉
2、「緑色の獣」（一九九一・四）―化物
3、「沈黙」（一九九一・一）―トラウマ語り〈救いなし〉
4、「氷男」（一九九一・四）―〈絶対的孤独〉女性
5、「トニー滝谷」―〈絶対的孤独〉男性
6、「七番目の男」（一九九六・二）―トラウマ語り〈救いあり〉
7、「めくらやなぎと、眠る女」―改稿（一九九五・一一「めくらやなぎと眠る女」一九八三・一二を改稿）・病〈救いあり〉

1「レキシントンの幽霊」、7「めくらやなぎと、眠る女」は、病という同じモチーフを持つが結末に差がある。1のケイシーは愛

する者に死なれた時、死んだように眠るという現在の医学では解明できない病を抱えている。そして、自分が死んだ時にそのように眠ってくれる相手はいないと語り、そこには救いが見いだせない結末となっている。対して、7は主人公「僕」が原因不明の耳の病を持つついとこのために病院に付きそう話である。1と同様に奇病を持つ人間が描かれているが、主人公「僕」は結末でいとこに「大丈夫だ」という言葉を残す。ここには1とは違って救いが見いだせる結末になっている。

2「緑色の獣」は、化物というモチーフが描かれ、1で描かれた幽霊と連関した流れがある。このテクストには対の存在はない。

3「沈黙」、6「七番目の男」は、トラウマを抱えた男が聴き手にトラウマを語る同じ構造を持っているが、結末が異なる。3はトラウマを語った事で語り手は「沈黙」の悪夢を見続けることに変わりがなく、語りによる救いはない。一回の語りでは克服できない「トラウマ」の深刻さが描かれている。しかし、地下鉄サリン事件・阪神淡路大震災後の6では、回復への過程が描かれている。ここではコミュニティとの繋がり、関係性の回復に重点が置かれ、救いを見いだせる結末となっている。

そして、4「氷男」、5「トニー滝谷」は絶対的孤独の男女差がある。テーマや構造が同じものでも結末が変えられている、いわば対となるテクストが同じ短編集の中に見いだせるのである。また、配列に目を向けると、「氷男」「トニー滝谷」を核にして扇形に広がる並びになっており、前半で救いがないモチーフを語り、後半でそれぞれに救いを見出している配列意識が窺える。

「トニー滝谷」は、関係性の希薄と喪失という村上文学の中心的テーマを持つが、父と語り手の存在というそれまでの村上テクストにない設定を用い、絶対的孤独が有効に描かれている。しかし、それはあくまで男性の絶対的孤独であった。「トニー滝谷」において封じ込められた妻の孤独は、「氷男」によって逆の視点で描かれ、男性の孤独に対する強力なアンチテーゼとなっている。村上が男女の孤独を描き分けたのは、性差によって孤独の内実が違うと認識し、それぞれに焦点を当て、描き分けてみることがより有効に描けると考えたからではないだろうか。実際に二つのテクストを比べてみると、そこでは互いが互いを相対化する緊張関係が生まれている。こういった対の形によってジェンダーの差異を見つめていると考えられるのである。

注

（1）ソイヌ氏（「名前からの逃避―『固有名』のアレゴリーとして読む『トニー滝谷』―」『九大日文』二〇〇七・一〇）は、固有名と匿名性に注目し、テクストを匿名性の持つ「とりかえ可能性」に挫折し、人間の根本的な一回性を思い出させる物語、と述べている。その他、エッセイとして鈴村和成「宮沢りえはなぜ泣けなかったのか（『トニー滝谷』）」（『解釈と鑑賞別

冊　村上春樹』二〇〇八・一）、イッセー尾形「幸福感の向こう側―『トニー滝谷』に出演して」（『遠近』二〇〇六・四）がある。

（2）斎藤学「買い物嗜癖」（『アルコール依存とアディクション』一九九七・六）

（3）注2に同じ。

（4）キャロリン・ウェッソン『買い物しすぎる女たち』（一九九二・五、講談社）

（5）『夢の消費革命』（一九九六・三、工作舎）

（6）丸山昇『上海物語　国際都市上海と日中文化人』二〇〇四・七、講談社学術文庫）上海の歴史的事実に関しては、同書を参照した。

（7）例えば林京子の小説「老太婆（ローターブオ）の路地」（一九七九）には、上海の戦禍の様子がよくわかる記述がされている。引用は『ミッシェルの口紅』（一九八〇・二、中央公論社）

ワンポゥツォが日本軍の統治下にある虹口地区に入ると、ひどい、と母が言った。市街地戦の中心地になった虹口地区は、想像よりも破壊がひどかった。家並みは残っているが、家の内は、砲撃を受けた天井から陽がさして、がらんどうになっている。人影もない。（略）日本軍が築いたらしい土嚢も、積んだままになって放置されていた。土嚢は、木綿の袋だったように思う。袋の中には土が詰まっていて、機関銃の襲撃にあったのだろう、横一列に弾痕が並んで袋が裂け、土がこぼれ落ちている。人家を盾にして築いてある土嚢の内側は底が暗く、空気が冷たくみえる。虹口地区を守備していた日本陸戦隊の兵隊たちは、人間一人がやっと通れる土嚢の内に身を潜めて、道の向こうから撃ってくる中国の兵隊たちと、撃ちあったらしい。

（8）藤井省三『村上春樹のなかの中国』（朝日選書　二〇〇七・七）

（9）作者は全作品版所収の際に次のように述べている。

トニー滝谷はそれから（引用者注　短編「眠り」）一年くらいあとに書いた小説で、もともとは『文藝春秋』のために書いたのだが、ここに収められたものはそれを長く延ばしたストレッチ版である。ちょっとややこしい話になるのだが、僕は最初にロング・ヴァージョンのトニー滝谷を書いた（a）そしてそこから余分なものをぎりぎりまで切り捨てて、はぎとって、ショート・ヴァージョン（あるいはミニマリスト・ヴァージョン）のトニー滝谷を書いて、それを『文藝春秋』に掲載した（b）。そして今回全集に収録するにあたって、（b）をあらためて長くして二回めのロング・ヴァージョンを作った（c）わけである。（『村上春樹全作品　1979～1989⑧』一九九一・七、講談社「自作を語る」より）

テキストとして使った『レキシントンの幽霊』版は、『全作品』版を更に改稿している。ヴァージョンの違いについて、前出の近藤氏は「父省三郎の人物像は、世知に長けた者から享楽的な者へと変貌し」、「同じL・Vでも単行本化（L・V―b）に際してはさらに推敲の手が加えられ、トニーの妻に関する表現から、〈精神の病〉〈薬物中毒のようなもの〉といった病理に関する直接的な言葉が削除されている点が、特に注目される」と論じている。

（10）小森陽一『ポストコロニアル』（二〇〇一・四、岩波書店）、姜尚中氏の一連の書籍等。

（11）心理学における孤独の性差に関する記述を掲げる。「パールマンら（一九七八）は、男性では妻と死別した者は妻のいる者よりも孤独感が有意に高いが、女性では夫と死別した者と夫のいる者の間で有意差がないことを見出した」（L．A．ペプロー／D．パールマン編『孤独感の心理学』一九八八・五、誠信書房）とある。

女性の孤独感は、対人関係に大きく寄与している。諸井克英氏は孤独感の性差について研究報告を行った（対象は大学生）。氏の調査では、男子が「自己の側面」「自らの志向性」に対し、孤独感を感じやすく、女子

は対人関係の側面からの原因帰属が重要となる。（『孤独感に関する社会心理学的研究』一九九五・一、風間書房）

＊引用は『レキシントンの幽霊』（文藝春秋、一九九六・一一）による。

―やまね・ゆみえ、広島国際大学非常勤講師―

国文学攷投稿規定

一、本誌は広島大学国語国文学会の機関誌として、学会員からの投稿を常時募集します。

一、投稿論文の採否は、当学会役員より選出された編集委員によって構成される編集委員会で決定します。

一、採否についてのお問い合わせには一切応じません。

一、投稿論文は四百字詰原稿用紙四十枚以内を原則とします。

一、投稿論文の末尾に氏名のふりがな・所属を明記してください。

一、ワープロ原稿での投稿の際には、縦書きの場合は30字×21行、横書きの場合は40字×35行の書式を使用してください。

一、編集の都合上、なるべくフロッピーでの投稿をお願いします。その際、使用の機種・ソフト名を明記してください。ただし、必ずプリントアウトした原稿の同封をお願いします。

一、論文掲載の場合、本誌三部と抜き刷り三十部を贈呈します。余分に必要な場合は、あらかじめお申し出があれば、実費でお頒ちします。

一、本誌に掲載された論文等の著作権は、著者に帰属します。ただし、当学会は本誌に掲載された論文等を電子化し、公開することができるものとします。

一、投稿論文の送り先　〒七三九―八五三二　東広島市鏡山一―二―三
広島大学大学院文学研究科内
広島大学国語国文学会事務局